

ISCAR-日本教育心理学会-DEE 共同ワークショップ『状況活動研究の最前線』
セッション「越境概念の再検討：コミュニティ間の“境界”をいかにとらえるか」

日時：2011年7月28日（木）16:50-18:00

会場：大正大学

以下、登壇者の発表内容をご紹介します。

◆青山征彦(駿河台大) /境界生成のポリティクス

・ Star(1989)の boundary object

→Same object is used by different communities in different meaning.

・ Aoyama(1999) : Open or Closed: On te boundary issues.

→薬品卸のデータベースの事例：誰が利用するかによって利用できるリソースが異なる

・ Engestrom(1995)の boundary object

・ 香川 (2007) boundary crossing の困難さ

◎境界は、コミュニティや歴史・実践の違いなどによって作られている。

◎日常では、境界を作る実践は、境界を横断する実践よりもありふれている。

事例1) ジャミング：強い雑音を送信することで放送を聞こえなく／見えなくすること

事例2) インターネットの通信妨害：

- ・ 中国が Google の検索を制限
- ・ タイがウィキリークスへの接続を妨害

事例3) 赤福の「製造目印の日付に記号を追加」

事例4) ナチスの国民ラジオ

◎伝えないことによって、情報を知っている人と、情報を知らない人を区別することになる。

- ・ 情報の伝達がコントロールされつづけることによって維持されることになる。

◎境界は、何らかの意図のもとに作られ、維持されている。

- ・維持には、道具や言葉などが関わっている。

◎「どのように境界が維持されているか」を検討することで、以下のような問いが、より理解できるようになるだろう。

→境界横断がなぜ学習をもたらすのか、なぜ難しいのかなど。

=====

有元典文（横浜国立大）／境界線を参照する：人工物としての音楽ジャンル

自分が誰か／何者かを規定するために境界を用いることがある。

◎Boundary as reference

水平的参照：境界の外の他者を見ることによって自己を規定する。

・外世界の参照：「和風」＝外の世界を参照とした概念（ex. 江戸時代に和食という概念はなかった。「和風」は階国後。）

- ・ジェンダー（間の他のジャンル）の参照：「お転婆」「女々しい」

- ・ジャンルの参照：「暴走族」と「走り屋」

◎Changing and Keeping unchanged

変えることと変えないこと：無変化でいることという動機もあるだろう。

非常事態の時に変革が必要になるが、普段は「変わらないということ」をしているのでは。ただし無変化は何もしていないということではない。

◎事例：Musician に関する実験

音楽は人の主体性が強く反映されたもののように思われている。でも、はたして自由なのだろうか？「ジャンル」は超えがたいということを示す実験事例。

・クラシックピアニストとジャズピアニストに「それいけアンパンマン」をそれぞれのジャンル風にアレンジするよう指示。

- ・ジャズ→コードネームを書く／クラシック→五線譜に音符をひとつひとつ書く。

◎結果：

- ・ジャンルは計画と演奏行為を御する／支配する
- ・コードの響きから筋肉運動に対しても影響を与える

◎「ジャンル」はルールのセットではなく、むしろ文化的実践そのもの。
「文化的実践を参照している実践」を人々はしている。参照されることで参照物になる。

=====

香川秀太（大正大）／境界をいかに捉えるか：境界変容、多重境界性、距離化

●4つの問い

①境界を消失させることはできるのか？

→否。それは境界のかたちを変えるだけ。

⇒"境界横断 boundary crossing"というより“境界変容 boundary transformation”ではないか。

②コミュニティの間にある境界はひとつだけ？

→否。2つのコミュニティには複数の境界がある。

⇒"multi-boundaries"といえるもの

③境界は誰かの意図で消したり、呼び起こしたりできるものか？

→否。簡単にコントロールなどできない。予期せぬ境界が起こる。

⇒“境界の統制困難性（difficulty of controlling boundaries）”

④境界線は明確に引けるものか？

→否。そう容易ではない。境界は曖昧で複雑である。

当人の立場や視点により、境界の見え方は異なり、しかも変化する。

さらには、それはたった一人分ではなく、複数分起こっているわけなので、本来境界はきわめて複雑で、境界を引くことは容易ではない。

→しかし、私達は確かに境界を感じたり、それについて語ったりしている。

⇒すなわち、越境とは「曖昧で複雑で変化を続ける世界を、二つ以上の集合体に分け(つまり境界線引きし)、それらの間にこういう乖離・断絶・境界があるとか、両者をつなげる道具を生成しようとか、越境が起こったなどと語り、固定化する、我々の言説実践から可視化される」。

⇒これを“距離化（distantiation）”（Kagawa & Moro, 2009）と呼ぶ

●上記を、学校インターンシップ・ボランティア実践のさまざまな問題、インフォーマルな勉

強会「GAKU」の事例から具体的に検討

●結果

①境界の消失？

→様々な学生が学年や学科や経験の境界を越えて集まる「GAKU」という新しいコミュニティ

→他方、別のメンバーで、新しいコミュニティが立ち上げられ、発展した

⇒一見、越境だったが、新しい境界も生まれた

→②その境界は、複数ある=Multi-boundaries

→③予測していなかった境界=Difficulty of controlling boundaries

・「境界」は消失しない。

→「境界越境」はあたかも境界が消えるかのようなイメージを与えるが、実は「境界の変形、boundary transformation」である。Boundary 発達とも言えるかもしれない。

→越境行為が起きたか、だけでなく、どんな新しい境界がどう現れたのか？を問う必要がある

・新たにできた「境界」をすぐに越境する必要はない。

→なぜなら、それぞれのコミュニティで文化が醸成される必要があるから。

④Distantiation (距離化) :boundarization and crossing as discursive practice

=====

◆コメント(伊藤崇(北海道大学))

・境界は固定されたものではない。ダイナミックなものだ。

・「見る」人によってオープンさが異なっている。中にいるメンバーにとっては「外部者ウェルカム」でも、外から見ると「怖い」=境界が強いものに見える。

・そうであるとする、境界を越えることは、一種のアクシデント。子どものように境界の存在を知らない人の存在が「突破力」になる。

◆コメント(Yrjö Engeström(ヘルシンキ大学))

・3つの発表とも、境界を固定的なものではなく、変容させるものと捉える"boundary in action"に関する研究。

・一方で、変わらない static boundary もあることを忘れてはならない。人を分け隔てる国境や宗教や民族の境界を忘れてはならない。流動的でおぼろげだが決して消えない。

・3つの研究は、boundary をめぐる研究を「boundary work」とでも呼ぶべき新しいレベルに押し上げた。越境論再考の機会だった。

